私を取り巻く医療環境

北海道医報通信員
滝川市医師会　理事
近藤医院
中　沢　洋　子

滝川市は中空知に位置し、人口は44,000人あまりです。

市立病院のほか、内科・外科・小児科・産婦人科・麻酔科・耳鼻科・精神科・整形外科・脳外科・眼科の開業医がおり、世代交代も行われていて、比較的充実した医療圏と思われます。私は開業して19年目になりますが、当初常勤の眼科は当院のみでした。平成6年から市立病院が常勤医となり、平成10年から2名の複数体制となることで、急患の受け入れが分散して楽になりました。時間外の仕事は楽になりましたが、保険の本人が1割負担に・70歳以上が1割負担に・本人がさらに3割負担・後期高齢者の負担増と保険の改正のたびに患者数は減ってきました。また、診療報酬がマイナス改定になるなど収入はさらに減り経済状態は以前より厳しいのが現状です。

直近の話題として後発医薬品の使用促進ということがあります。

滝川市国保は「高医療費の指定市町村の指定」を受けており、医療費の適正化の取り組みが国、道から指導されているとのことです。そのため、ジェネリック医薬品希望カードの配布が10月に実施され、自己負担額の軽減例の個別通知が年度内に500件程度行われる予定です。

後発医薬品は私も処方していますが、眼科ですので当然点眼薬が中心となります。先発品と比べて効果が同等であることは当たり前ですが、さし心地はどうか・副作用がどうでるかということが問題になります。そのため、処方せんの後発品に変更可という欄に丸をつけることはまったく使用経験のない点眼薬を患者様に渡してしまう可能性があり、副作用が出た場合の責任は私にあるということになりますので、その点を厚生労働省はどう考えているのでしょうか。またいつも言われることですが、後発医薬品の安定供給ということも不安としては残ってしまいます。

医療費を全体として抑えることは経済としては大事なことと思いますが、後発医薬品でも価格の安いほうへどんどん変更を強制するようなやり方には納得できません。

開業2周年を迎えました

滝川市医師会
こしお整形外科クリニック
院長
小椎尾　　恒

平成19年5月に滝川市で整形外科クリニックを開業し、早2年になりました。開業前、私の妻は過疎化著しい空知で開業することを不安に思っていたようです。札幌市内や旭川市内での開業もリサーチしたこともあります。しかし、都市圏では開業コストや適地選択などの面で納得できず、成功させるパッケージができませんでした。(こんな時代が悪いのでしょうか？）以前から開業するなら地域医療に関わりたいと思っておりました。ではなぜ空知か？といえば、研修医の頃初めて赴任した地方病院が砂川でした。当時、オペや救急医療と希望に燃えていた若き研修医の姿を懐かしむかのように、気づけばいつの間にかこの地を選んでおりました。滝川市医師会は鈴木会長を中心に会員も大変よくまとまられており、学術、親睦の交流もさかんで、アットホームでとても魅力的な医師会です。私の開業に際しましても、皆様で温かく歓迎していただきました。大変感謝しております。

整形外科クリニックの存在意義は、地域の高次医療機関と連携し、いかに適切なプライマリーケアを行うことができるかであると思います。当院としては、UP TO DATEな整形外科保存治療を徹底的に行うことに重点を置きました。あれだけ好きだったオペは完全に封印してしまいました。オペにかかる時間とコストが近年のクリニック経営には重荷であると考えるようになりました。また、保存治療は整形外科医の中では多少軽んじられている節があり、さまざまな医療類似行為が乱立する現状を生んでいます。専門医が保存治療を何よりも優先するのは北海道ではちょっと変わったスタイルだったと思います。お陰様で開業以来、北は深川、東は芦別、南は美唄、西は留萌とかなり広範囲に患者様が来院していただき、クリニックの開業としては順調に推移しているものと思います。

滝川に来た際にはぜひお立ち寄りください。今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。